富永神社祭礼奉納

能組

とき　平成十六年十月八日（金）
午後五時始
ところ　富永神社能楽殿

5:00分頃

仕舞　葛城　島尚大郎
草紙洗小町　平野瑞季

5:10分頃

狂言　盆山
盗人　山本佳澄
何某　天野萌
後見　酒井宏

仕舞　国栖　村田昂平
七騎落　加藤晃
西王母　今泉尚美

5:40分頃

狂言　水掛聟
聟　佐野泰三
男　小澤貞博
女　山口俊一
後見　権田重紘

仕舞　敦盛　島考三郎
田村　谷野允千帆
柏崎　平野阿裕美
大江山　岩崎葉子

6:30分頃

仕舞　猩々　杉浦史佳

（休憩　三十分）

7:00分頃

能

六浦

シテ 中嶋康夫

ワキ 加藤貢

間 加藤賢一

後見 鈴木肇

地謡 杉浦史佳 太田康弘 太田研司 高林呻二 竹内省吾 高林白牛口二 竹内三郎 森田牧 野修

大鼓 清水利高

小鼓 柳原富司忠

太鼓 鈴木崇史

笛 今泉英三

8:00分頃

狂言

萩大名

大名 大原正巳

太郎冠者 天野雅夫

茶屋 山本勝

後見 酒井宏

8:40分頃

半能

高砂

シテ 清水利高

ワキ 竹内三郎

後見 鈴木肇

地謡 長田共永 太田康弘 太田研司 高林呻二 鈴木崇史 高林白牛口二 牧野修 今泉英三 杉浦史佳 竹内省吾

大鼓 河村総一郎

小鼓 森田牧

太鼓 中嶋康夫

笛 酒井淑規

（終了予定 九時十分頃）

主催 本町区

あらすじ

狂言

盆山（ぼんさん）

流行の盆山（盆石）をたくさん持つ知人の庭に、こっそり盗みに入った男（シテ）は、盆山を物色しているところを家人に見つけられ、あわてて盆山の陰に隠れる。盗人が顔見知りだと気づいた主人は、さんざんになぶってやろうと、あれは犬だ、猿だといい、盗人はそのつど言われた通り、鳴き真似をするが、次に鯛だ、と言われて……。

狂言

水掛聟（みずかけむこ）

聟（シテ）が田の水回りに来て、水が隣の舅の田に取られていることに気づき、畦を切って水を自分の田に引き、他の畑を見回りに行く。次に同じように見回りに来た舅は田に水がないのに気づき、聟の田から水を引き返すと、水をとられない様に番をする。そこえ戻ってきた聟が水を引こうとして、舅と口論になる。互いに畦を切って争う所に、妻が来て仲裁をするがとまらず最後は……。

能

六浦（むつら）

都の僧が東国行脚の途中、相模国六浦の称名寺に立ち寄る。山々の紅葉も今が盛りとみえる中に、一本の楓だけが一葉も紅葉していないので不審に思っていると一人の女が現われ、そのわけを語って聞かせる。昔鎌倉の中納言為相がこの寺に紅葉を見に来たとき、山々はまだなのにこの楓だけが紅葉していたので、一首の歌を詠じた。するとこの楓の木は喜んで、このように面目をほどこした上は身を退くのが天の道と考え、それ以来常磐木のようになったのだと、女は告げて秋草の中に消え失せる。（中入）

その夜、僧がこの寺で読経していると、楓の精が女体となって現われ草木国土悉皆成仏の仏徳と讃えて神楽を舞い夜明けとともに消える。

狂言

萩大名（はきだいみょう）

国元に帰る事になった田舎大名が、良い庭を持っている知人の所に物見遊山に訪れるが、丁度、萩の花の盛りで、その庭の見物に行くと、亭主が風流な人で、歌を詠まされるからと言われ、太郎冠者に教えられた和歌を覚えて行くが、その首尾は……。

能

高砂（たかさご）

九州肥後国（熊本県）阿蘇宮の神主友成は、都に上る道すがら、播州（兵庫県）高砂の浦に見物に立寄ります。たそがれ近い浜辺には吹くともない微風が松の枝にそよぎ、尾上寺の人相の鐘が響いてきます。そんな静かな景色のなかに、夫婦と覚しい抜群に年たけた老夫婦が墨絵のように現われます。友成は老人たちをみて、高砂の松の由来を問います。老翁は古今集の序にある高砂住江の松を「相生」とよぶいわれを語り、また高砂を遠い奈良朝に、住吉をいまの延喜の聖代にたとえ、松の緑の尽きないように御代の栄えも変わらぬという古代の言葉を伝えます。友成はめでたい由来をきいて大いによろこびなお詳しい松の物語りをせがみます。

老翁は更に語をついで、松が四季を通じてその緑は変わらず、花は一千年に一度ひらくという「生」の象徴として古来から異国でも本朝でも賞讃されているなど、さまざまな例をあげ、二人は相生の松の精が仮に老夫婦の姿になって現われたのだと明かして沖の彼方にきえてしまいます。

友成は日の出とともに高砂の浦を出帆して住江の岸に到着します。すでに夜も更け、中天高く月が澄みわたると、きらめく波間から住吉明神が出現して、国土安穏寿福千年を祝う神遊びの舞を舞います。波頭は青海波の舞楽、颯々と鳴る松風は聖代を謳歌するかとも聞えてめでたい限りです。

半能

一番の能の前半をほとんど省略し、後半のみを演ずる演能方法である。